

『輝風 (テリテ)』 - 雨鼠

※お読みいただく際はブラウザの横サイズを調節してください。より快適にお読みいただけます。

雨は、好き。

どっさり降る雨は憂鬱だけど、しとしと降る雨を窓から眺めるのはなかなか楽しい。

楽しいけれど、ときどきとても切ない。

「どうして、泣くの？」

細い腕で窓を開けて、そっと涙を流す彼女に手を差し伸べる。

「あなたの暖かさを、あたしは知ってる」

人は雨を冷たくて嫌なものだと言う。けれど——果たしてそうかしら？

恵みの雨がどうか、そんなことを言うつもりはないわ。あなたは、少なくともあたしにとってはとても素敵なもの……。

あたしは眠ってしまっていたらしい。起き上がって一つ、伸びをする。

いつのまにか元気を取り戻した「彼女」は、精一杯の笑顔を見せてくれた。お日様がまぶしい。

少しおなかが減っていたから、ルームメイトがテーブルの上に残っていた食事を採ることにした。いつもお馴染みのメニューだ。居候の身であり贅沢は言えない。でも、あたしはこの代わり映えのしない食事を結構気に入っているの、不満はない。

満腹のあたしは、コテンと横になり、ベッドの上から窓の外を眺める。彼女の機嫌はすっかり直ったらしく、外に出ておいでと誘っている。その提案がとても魅力的に感じられたので、あたしは散歩に出かけることにした。でも、このまま出て行くのは少しみっともない。きちんと身だしなみを整えてから。

雨上がりの街は、好き。

街路を彩る木々も、流れる風も、みんな

きれいに洗われたような感じ。少しだけ土のにおいなんか漂ってくる。結構風情があっていいな、と思うのはあたしだけかしら？

いつものコースを回る。特に変わったことはなかったけど、団栗や栗が落ちていたり、風が小麦色になっていたりして、何か物悲しくなる。毎年のことだけど、なぜかこの季節は心に北風が吹きこむ。きっと、冬支度ができていない心が風邪をひいているのだと思う。

散歩の最後はいつも決まって隠れ家に行く。隠れ家というのは、数年前に潰れた駄菓子屋の跡だ。とっくに取り壊されてもいいはずなのに、未だに残っている。軒先には毎年やってくるツバメが家なんかを残していて、やっぱり壊すのはもったいないな、と思う。

見た目頑丈に閉められている扉が、実は簡単に開けられることをあたしは知ってる。中に入って、南向きの大きなガラス窓がある場所まで入っていく。一番日当たりが良くて暖かい。外は少し寒かったから、あたしは思わずそこに寝転んだ。

「やあ」

声がする。先客がいたようだ。彼のことは、別に知らないわけじゃない。彼もあたしと同じでここが気に入っているようだった。あたしも、こんな居心地のいい場所を独り占めするつもりはなかったし、第一彼に始めて会ったとき、彼はまだほんの子どもだったから、弟の面倒を見ているようなつもりで遊んでやっていた。

「いい天気だね、今日は」

「ふうん」

「え、何？」

「挨拶ができるようになったのね」

「……酷いな」

「ついこの前まで、顔を見たら飛びついてくるような子どもだと思ってたけど」

「まあ……あながち間違っちゃいないけどさ」

彼は首をもたげる。彼の首にはアクセサリーが掛かっている、乾いた金属音を立てる。

「どうしたの？ それ」

彼は買ってもらったのだ、と説明した。

「似合っていないわよ」

「分かってるけどさ、ちょっと嬉しかったから」

「あたしはもう捨てたけど」

「……酷いな。つけた方がいいのに」

「分かってる」

分かってはいるけれど、あたしにはその「首につけるアクセサリー」がおしゃれだとは決して思えない。だからつけていないだけだ。つけるもつけないもこっちの勝手に、もらったものだろうと拾ったものだろうと、いいと思えば身に着けていればいいし、まずいと思えば外してしまえばいい。

好きなものは好きと言えればいいし、嫌いなものは嫌いと言えればいいはずなのに、例えばあたしのルームメイトなんかは、よく家に帰ってきて愚痴をこぼす。もっと肩の力を抜いて生きればいいのかね。

「そうもいかないんだよ、きっと」

彼はそんなあたしの愚痴を聞いて体を起こす。

「分かってるけどさ……」

窓の外には雲が流れてくるのが見える。近いうちにまた雨が降るのかもしれない。確かに、分かってはいてもどうしようもないことはたくさんあるような気がする。

「なくなるらしいんだよ」

「何が？」

「ここ。壊されるんだって」

「……へえ」

「寂しくないの？」

「寂しいけどさ」

あたしは天井裏で何か物音がしたように感じて、頭の上を見る。

「仕方ないわよ。おばあさん、いなくなっちゃったもん」

あたしが天井裏に上がろうとするのを、駄菓子屋のおばあさんはよく心配していた。

どうしようもないことが積み重なって、きっと世界は回っている。無力な自分が、時に腹立たしくなる。

「好きだったんだけどな」

「あたしもよ」

あたしたちに同情したのか、彼女はまた泣き始めた。近くで雷が鳴って、びっくりして窓の外を見る。

「壊れそうだね」

「そうね」

「壊れちゃえばいいのにね」

「……そうね」

土砂降りの雨。街を洗うだけでなく、全てを洗い流す雨——

「また、来るよね、ここ」

「先のことは分からないわ」

「僕だって分からないけどさ」

「約束はできないけど、それでもいいなら」

あたしたちはどちらからともなく、二度と帰れない場所を後にした。

濡れながら歩くのも、悪くない。

霧のようになった雨の中を歩いて、あたしは家に帰って、そして寝た。
びしょ濡れになったルームメイトが帰ってきたのは、もうすっかり暗くなってから
だった。お日様がなくなった後も、ずっと雨は止まなかったらしい。

泣いている彼女の顔は、好きじゃないかもしれない。
疲れきって夕食の用意をする彼女を見ると、風邪をひいた心がくしゃみをする。
彼女たち人間の世界に、どんな「どうしようもないこと」があるのか、猫の姿をし
ているあたしには到底分からないと思う。でも、何とかしたいと思う気持ちは一緒な
のかもしれない。

部屋でくつろいでいるように見える彼女にそっと近づいてみる。彼女は笑顔で迎え
てくれたので、少し安心した。けれど、あまり素敵な笑顔ではないわね。

あたしは、あなたが好き。
馴れ馴れしくされるのは嫌だけど、あなたのちょっとドライな感じはとても嬉し
い。
嬉しいけれど、ときどきとても切ない。
「どうして、泣くの？」
あたしは彼女の膝に手を乗せる。
「あなたの暖かさを、あたしは知ってる」
人はあなたを冷たくて嫌だと言う。けれど——そんなことはないわ。
あたしの背を撫でるあなたの心は、あたしにはすっかり透き通って見えてるんだか
ら。
決して、そんなことはない。

おやすみなさい。
明日目が覚めれば、涙の乾いた世界が、きっとあなたを待ってる。

[戻る](#)